

高齢者5割不適切な薬

うち8%で副作用

厚労省研究班調査

在宅医療処方

副作用の恐れがあるため高齢者に「不適切」とされる薬が、在宅医療を受ける高齢患者の48%に処方され、うち8%の患者に薬の副作用が出たという大規模調査結果を、厚生労働省の研究班がまとめた。高齢者の在宅医療で処方の実態が全国規模で明らかになるのは初めてという。同省では高齢者に広く不適切な処方が行われている可能性があるとして、来年の診療報酬改定で薬の適正使用を促す枠組み作りを乗り出す方針だ。

〈関連記事3面〉

高齢者は薬の代謝機能が衰えるため副作用が出やすい。近年欧米では高齢化に伴って社会問題になり、学会などが高齢者には避けるべき薬のリストを作っている。日本にも同様の基準は

◆不適切な処方をされた主な薬の種類と副作用の例

| 薬の種類 | 副作用の例 | 件数 |
|---------------------------|------------------------|-----|
| ベンゾジアゼピン系 (睡眠薬・抗不安薬) | ふらつき、眠気、物忘れ、幻覚、転倒、意識障害 | 103 |
| スルピリド (胃腸薬・精神症状改善薬) | ふらつき、ふるえ、こわばり、便秘、歩行困難 | 11 |
| ジゴキシン(心不全治療薬) | 食欲不振、中毒、むかつき、吐き気、幻覚 | 9 |
| チクロピジン(抗血栓薬) | 胃腸障害、内出血、脳内出血 | 4 |
| 抗コリン作用の強い抗ヒスタミン薬(抗アレルギー薬) | 口の渇き、ふらつき、不快感 | 4 |

※厚生労働省研究班の調査結果に基づき作成

困難な患者を医師が訪問する在宅医療に注目。医師と連携した薬剤師が訪問業務を行う全国3321薬局に調査を実施した。1890薬局が回答し、在宅医療を受ける65歳以上の患者4243人の処方薬を把握した。同研究班がこのデータを米国で高齢者の処方指針とされるビアーズ基準の日本版に基づき分類すると、2053人(48.4%)に「不適切」とされる薬が処方されていた。

このうち165人(8%)に副作用が認められた。複数の薬の副作用が出ている例もあった。

最も多かったのはベンゾジアゼピン系の睡眠薬・抗不安薬で、ふらつき、眠気、

転倒、記憶障害の他、妄想や幻覚などの副作用が出た患者もいた。心不全に使うジゴキシンは食欲不振や中毒など、胃潰瘍や精神症状

の改善に使われるスルピリドでは震えやこわばりなどの副作用があった。

研究代表者の今井博久・国立保健医療科学院統括研

「ピアーズ基準 一般的な診療で高齢者には処方避けるべき薬のリスト。米国で普及し、日本版は2008年に作成された。一般成人の用量では過剰になりやすく、高齢者には副作用のリスクが効果を上回る可能性があるものを「不適切」な薬として理由や代替薬を示している。やむを得ず使う場合の注意点も盛り込まれている。

EU映画市場開放促す

EPA交渉 日本、上映枠見直し要求

日本政府が、欧州連合(EU)と進めている経済連携協定(EPA)交渉で、EUに映画市場の開放を促す狙いがある。

自国映画の上映日数などを義務づけるこの制度は、文化保護などを目的に、英国が1927年に初めて導入したとされる。

フランスでは現在、映画

傘下の米映画制作・配給会社も多くの作品を上映している。

ただ、EU側は、自国作品の上映義務を撤廃すると、ハリウッド作品の流入などにつながるため、慎重な姿勢だ。EUの映画産業の規模は、2010年の売上高が600億円(約7



英語でひとこと探せ！ポケモン

新聞も、スマホも。読売プレミアム

ニュースや特典が満載 yomipre.jp